

サイエンスカフェへ行こう

北海道大学大学院理学研究院教授 杉山 滋郎

1. はじめに

世の中、「〇〇カフェ」ばかりである。「クラシックカフェ」といえば、クラシックの名曲をくつろいだ気分で見聞かせてくれる、NHK-FMの番組。「検査カフェ」とは、券売機で希望のメニューを選んで手軽に受診できる、熊本大学附属病院のサービスだ。

こうした流行を生み出したのは、「サイエンスカフェ」である。1990年代末にイギリスで誕生し、ヨーロッパ各国のほか、オーストラリアやアメリカ、インド、韓国へと波及し、日本でも2005年から広がりはじめた。今年年間に1000回を超えるサイエンスカフェが各地で開催されている。とりあげられるテーマも、天文学などの基礎科学からテクノロジー、はては人文・社会的なものまで多様である。ウェブサイト「サイエンスカフェ・ポータル(<http://cafesci-portal.seesaa.net/>)」で探せば、お住まいの地域で、好みのテーマのものがきっと見つかるだろう。

「〇〇カフェ」に共通するのは、「気軽に～できる」ことだ。「〇〇カフェ」の元祖、サイエンスカフェも例外ではない。「コーヒー片手に科学技術について気軽に語り合おう」という趣旨で、喫茶店(カフェ)などで開催されるイベント、それがサイエンスカフェである(写真1)。



写真1 札幌駅の近くにある書店前で開催される「サイエンスカフェ札幌」。たまたま通りがかった人たちが立ち止まって参加することができる。

2. サイエンスカフェのキーポイント

「コーヒー片手に…」というフレーズには、サイエンスカフェのキーポイントが二つ含まれている。

まずは、「気軽に」という点である。サイエンスカフェは、必ずしも喫茶店で開催されるわけではない。書店の一週で、あるいは図書館など公共施設(のあったビル)の一角で、お寺で、酒蔵を改造したレストランで(日本酒を味わいつつ)などと、開催場所は様々である。

要は、人々が気軽に出かけていける場所を会場にする、という点がポイントだ。研究者が、ふだん生活する大学や研究所から外に飛び出し、市民の生活空間に入り込むのである。

研究者たちはこれまでも、科学技術に対する国民の理解を増進するべく、公開の講演会や講座を開催したり、研究所の一般公開を実施するなど、市民に自分たちの研究を知ってもらうための活動に力を入れてきた。それらは、科学技術に対する「理解増進活動」と称され、国もそうした活動を様々なバックアップしてきた。

しかし、サイエンスカフェでは、研究者たち自身が日々活動する生活空間をあとにし、「市民の懐に入るべく、外に出て行く」。サイエンスカフェには、これまでの理解増進活動に比べ、「場所」の新しさがあるのだ。

たかが場所と思うかもしれないが、されど場所である。そのことは、あなたがふだん行きつけない場所、たとえばビジネスマンが行き交うオフィスビルの中の会議室に足を踏み入れたときの、あの居心地の悪さを思い起こしてみればよいだろう。打ち解けて気軽に会話する、というわけにはいかないだろう。

「コーヒー片手に…」というフレーズに含まれるもう一つのポイントは、「語り合う」という点、対話を重視する点である。

対話を実現するために、専門家による話題提供の時間は概して短く、質問の時間がたっぷりとられる。一般的な講演会では、最後の10分ほどになってか

ら、「せっかくの機会ですから、ご質問があれば、二三お受けします」と申しわけ程度に質問の時間がとられるが、それとは大違いである。

3. 理解増進からコミュニケーションへ

従来の理解増進活動は、科学知識を持った専門家が、いまだ知識を持たない一般市民に対し、一段高い所から知識を提供するという性格が強いものだった。それに対しサイエンスカフェでは、場所の工夫、運営の工夫などを積み重ねることで、話し手(科学者)と聴衆との関係をフラットにする、同じ目線で語り合えるようにする、といったことに意を尽くす。

その結果、市民が専門家に対し率直に臆することなく質問を発することができるようになり、双方向的なコミュニケーションの成り立つ基盤ができる。専門家と市民が同じ目線で語り合うことを追求する、この点を強く意識することが、かつての「理解増進活動」という言葉に替えて「科学技術コミュニケーション」という言葉が使われる理由の一つである。

科学技術コミュニケーションにおいては、「科学技術コミュニケーター」という役割を持つ人の存在がクローズアップされる。科学技術の専門家と非専門家(一般市民)との間で、コミュニケーションがうまくいくよう仲立ちや橋渡しの役割をはたす人のことで、サイエンスカフェの会場でも活躍する。

科学技術コミュニケーター(ファシリテーターと呼ばれることもある)は、単なる「司会進行役」ではない。話し手と聴衆との間にフラットな、気軽に話せる関係を創りだして、両者の対話を促進する。

4. なぜ今、科学技術コミュニケーション?

それにしても、なぜ今、科学技術コミュニケーションが叫ばれているのだろうか。

わが国で「科学技術コミュニケーション」という言葉が広く使われ始め、科学技術コミュニケーションの活動が活発になったのは、2005年のことである。日本のあちこちにサイエンスカフェが登場し始めたのも、この年であった。

文部科学省の肝いりで、科学技術コミュニケーターの育成も2005年にスタートした。その前年、2004年に発行された『科学技術白書』は、双方向的なコミュニケーション/対話などを特徴にもつ科学

技術コミュニケーションが重要だと訴えていた。科学技術と社会との間に生じる様々な軋轢を解消するのに、もはや従来のような理解増進活動では立ちいかない、という状況認識からである。

これに加えわが国では、「理科離れ(理科への関心の低下や科学リテラシーの低下)」への対処という面もあった。そして、学校での理科教育を充実させる役割も科学技術コミュニケーションに求められる。

5. 高校生とサイエンスカフェ

サイエンスカフェを教育活動のなかに取り入れてみたいという学校の先生方が少なくない。実際、課外活動の一つとして、あるいは総合的学習の一環として、生徒にサイエンスカフェに参加することを推奨する、という学校がある。すぐにでもできる、サイエンスカフェの活用法である。

ただし、参加する以上は、積極的に「対話する」という姿勢が欠かせない。サイエンスカフェは、学校での勉強とは違って、知識を効率的に吸収することを目的とした場ではないのだから。先生方にも生徒たちにも、この点を理解していただく必要がある。

これとは違って、学校でサイエンスカフェを実施する、という試みもある。教室に大学の先生などを招き、缶コーヒーやお茶を飲みながら、科学技術についての話を聞こう、というのである。

たしかに、飲みものを導入することで、ある程度は「気軽に」という要素を実現できるかもしれない。でも、下手をすると、いわゆる出前授業と何の変わりもないものになりかねない気もする。

というのも、学校という場で実施する限り、生徒にしてみれば「いつも勉強をしている場」でのイベントである。勉強=知識の吸収、というモードから抜け出た「対話」が、言い換えれば、高校生ならではの感性あるいは問題意識を前面に出しての「対話」が、圧倒的知識量と権威をもつ科学者との間で、はたして成り立つものだろうか。

むしろ学校という場を離れてのサイエンスカフェ、あるいは父兄や地域の人々をまじえてのサイエンスカフェなどを工夫する方が、よりサイエンスカフェ本来の精神を活かしたものになるのではなかろうか。学校の先生方の、今後の創意工夫に期待したいところである。